

# DPCの評価について

- 1 平均在院日数について
- 2 再入院率について
- 3 転帰(治癒・軽快)について
4. DPC対象病院での診療状況について

# 1 平均在院日数について

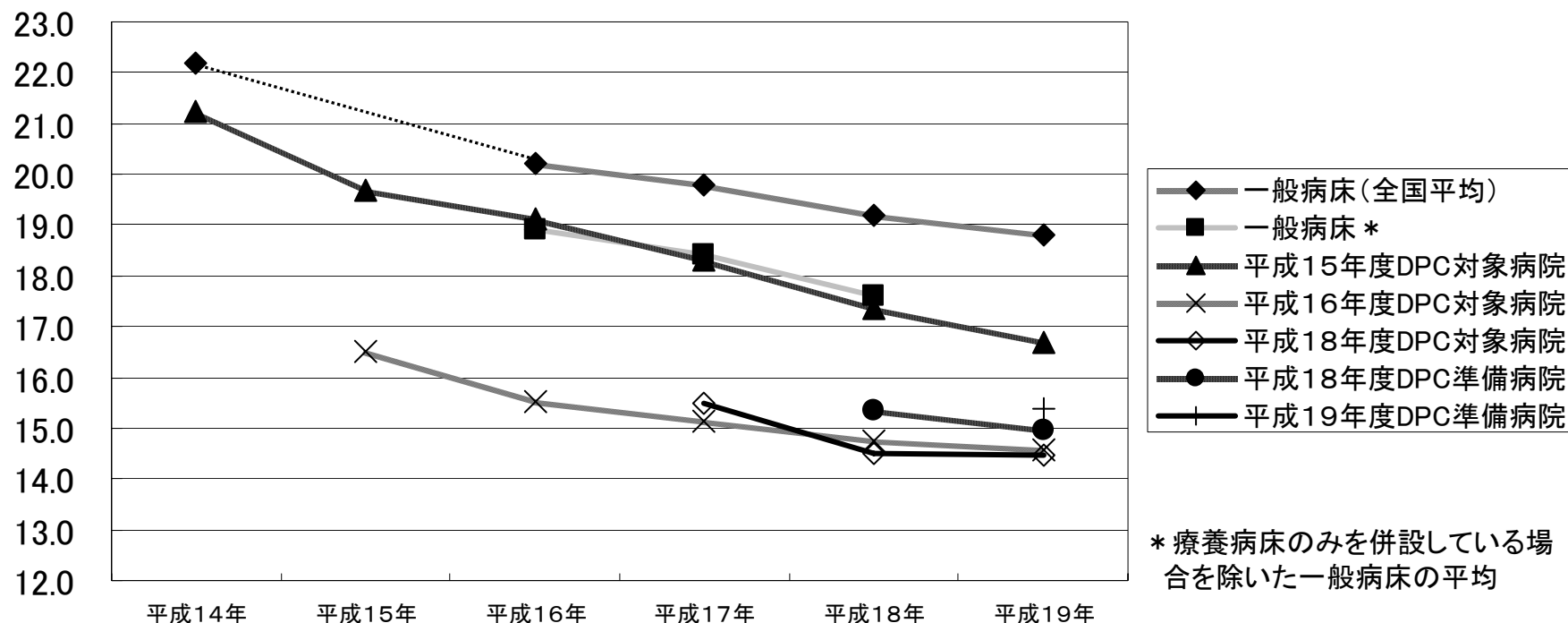
## DPCにおける平均在院日数の年次推移

病院類型	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
平成15年度 DPC対象病院	19.13	18.31	17.35	16.70
平成16年度 DPC対象病院	15.54	15.15	14.74	14.58
平成18年度 DPC対象病院	・	15.48	14.52	14.48
平成18年度 DPC準備病院	・	・	15.36	14.97
平成19年度 DPC準備病院	・	・	・	15.40

出典 平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)

# DPCにおける平均在院日数の推移

- 一般病床における平均在院日数(全国平均)は減少傾向である。
- DPC対象病院及び準備病院の平均在院日数も全国平均と同じく減少傾向である。

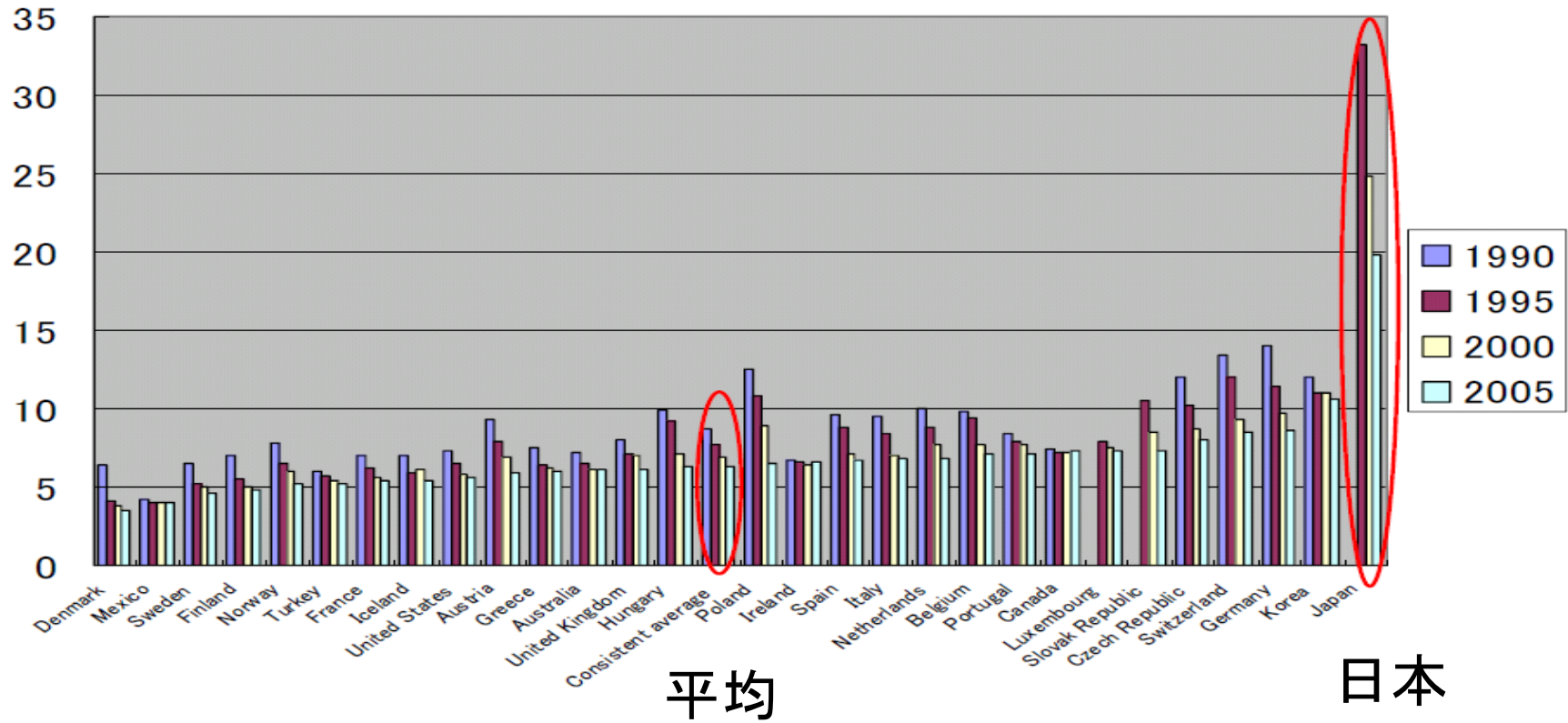


出典 病院報告(厚生労働省大臣官房統計情報部)  
平成18年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)  
平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)

# 諸外国の平均在院日数の推移

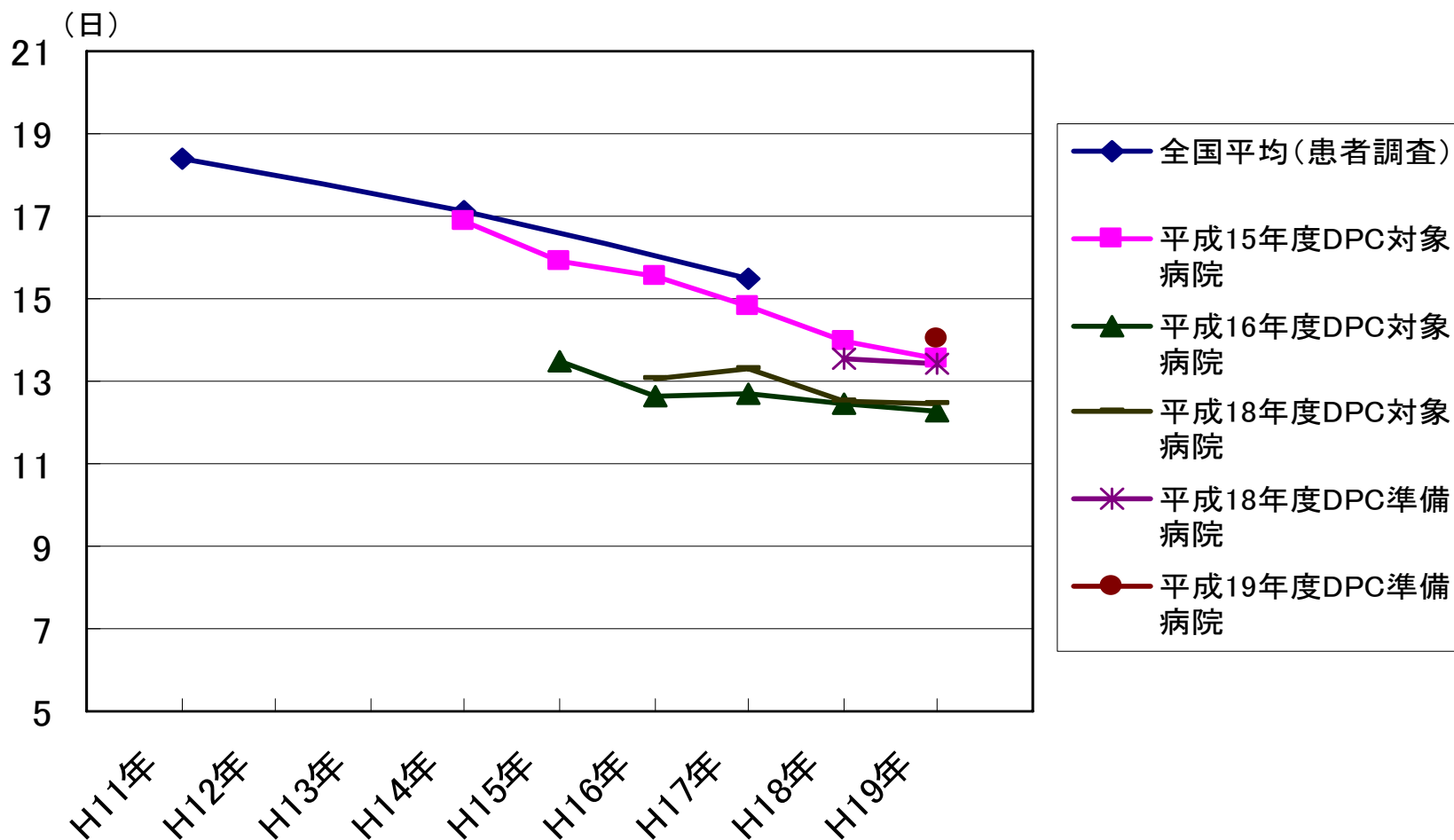
○ 90年代以降、急性期医療における平均在院日数は諸外国で減少傾向にある。

急性期医療の平均在院日数 1990 - 2005  
(OECD Health Data 2007)



# 手術後在院日数の推移

- 手術後の在院日数は、全国で減少傾向にある。
- DPC対象病院及び準備病院の手術後の在院日数も全国平均と同じく減少傾向である。

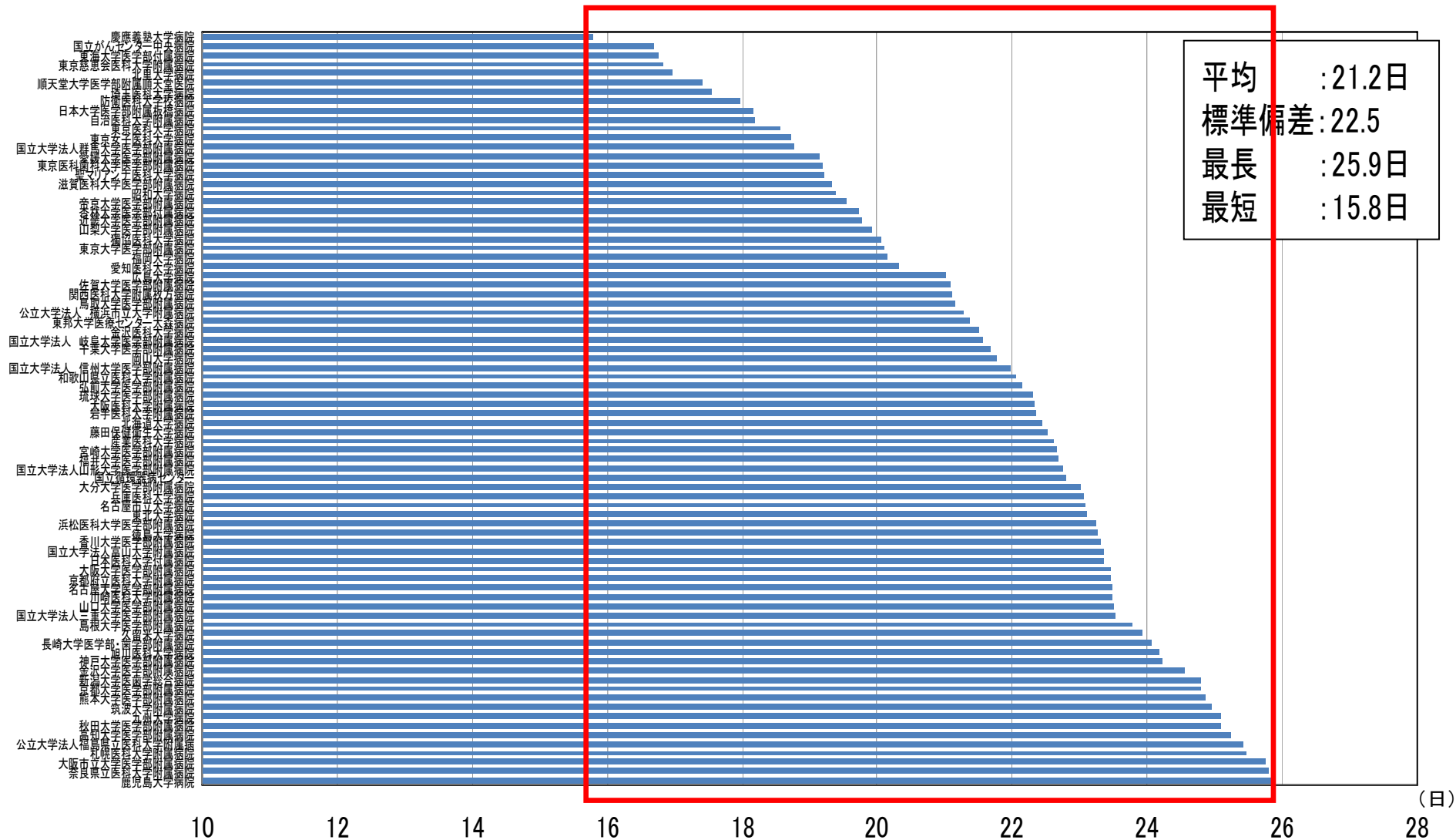


全国平均の推移は、患者調査(厚生労働省大臣官房統計情報部)  
DPC対象及び準備病院の推移は、「DPC導入の影響評価に関する調査」より集計

# DPCにおける平均在院日数の変化

(平成15年度DPC対象病院の例)

平成14年

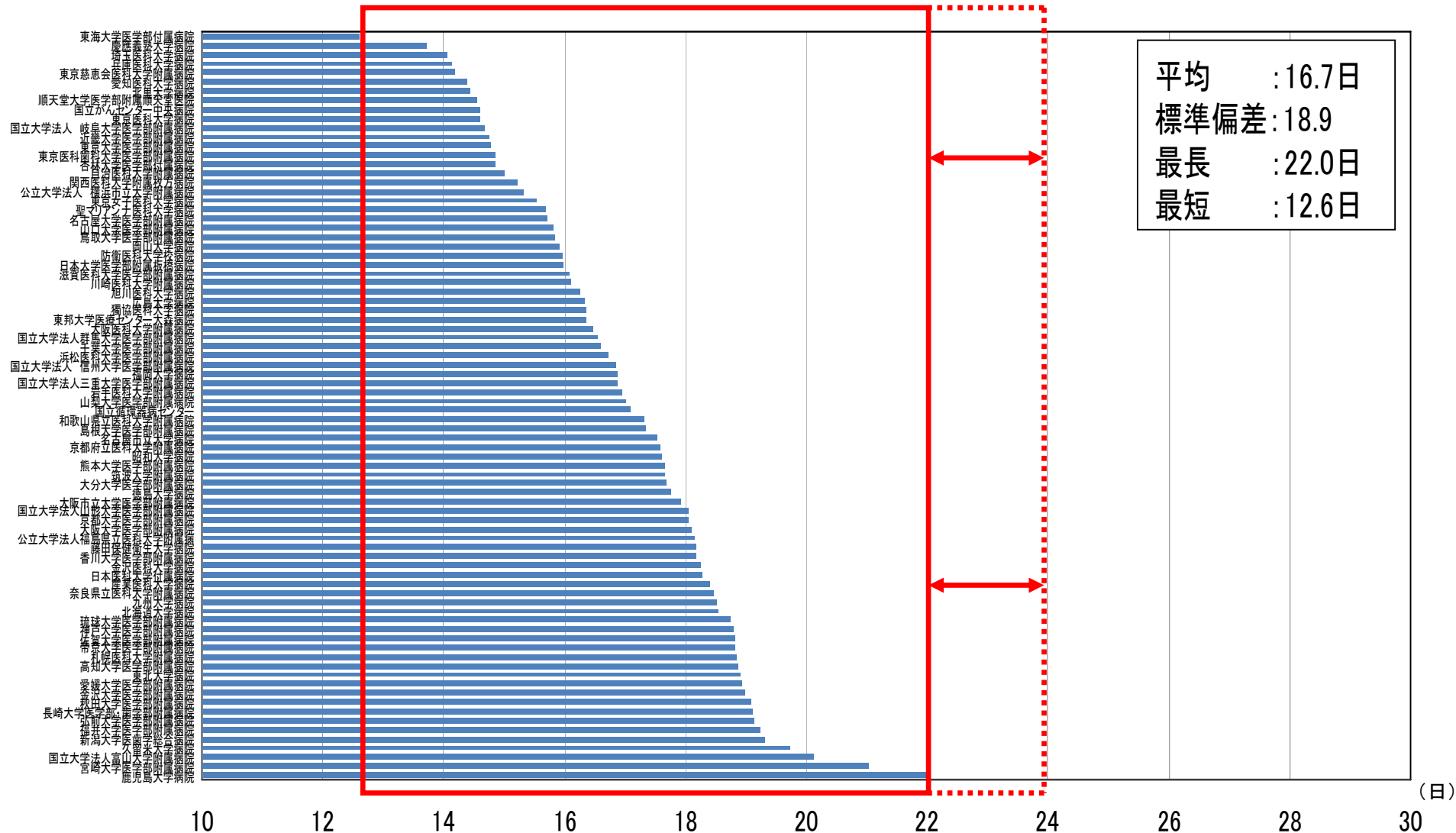


「DPC導入の影響評価に関する調査」より集計

# DPCにおける平均在院日数の変化

(平成15年度DPC対象病院の例)

平成19年



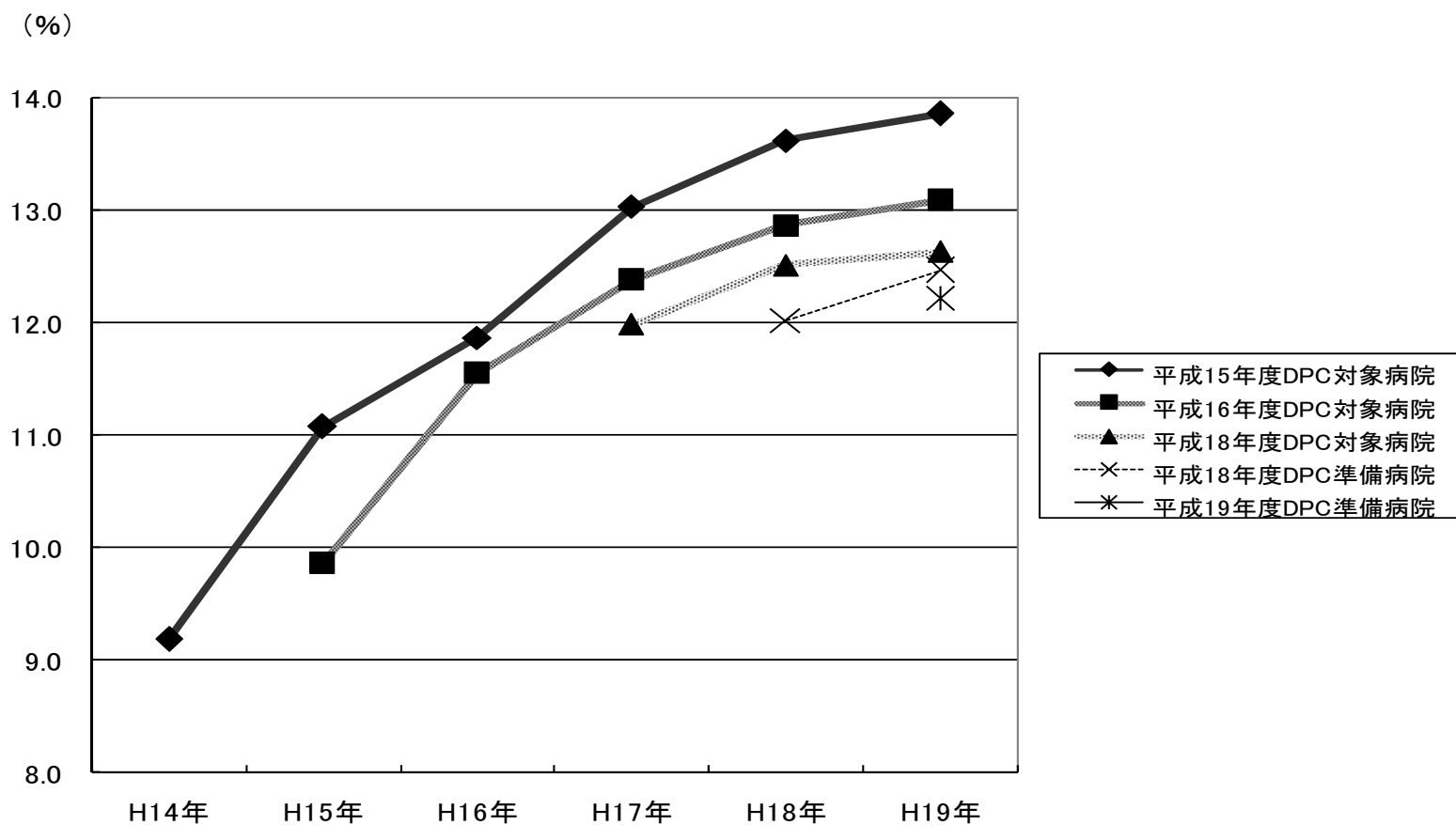
「DPC導入の影響評価に関する調査」より集計



## 2 再入院率について

# DPCにおける再入院率の推移

○ DPCにおける再入院率は増加傾向にある。

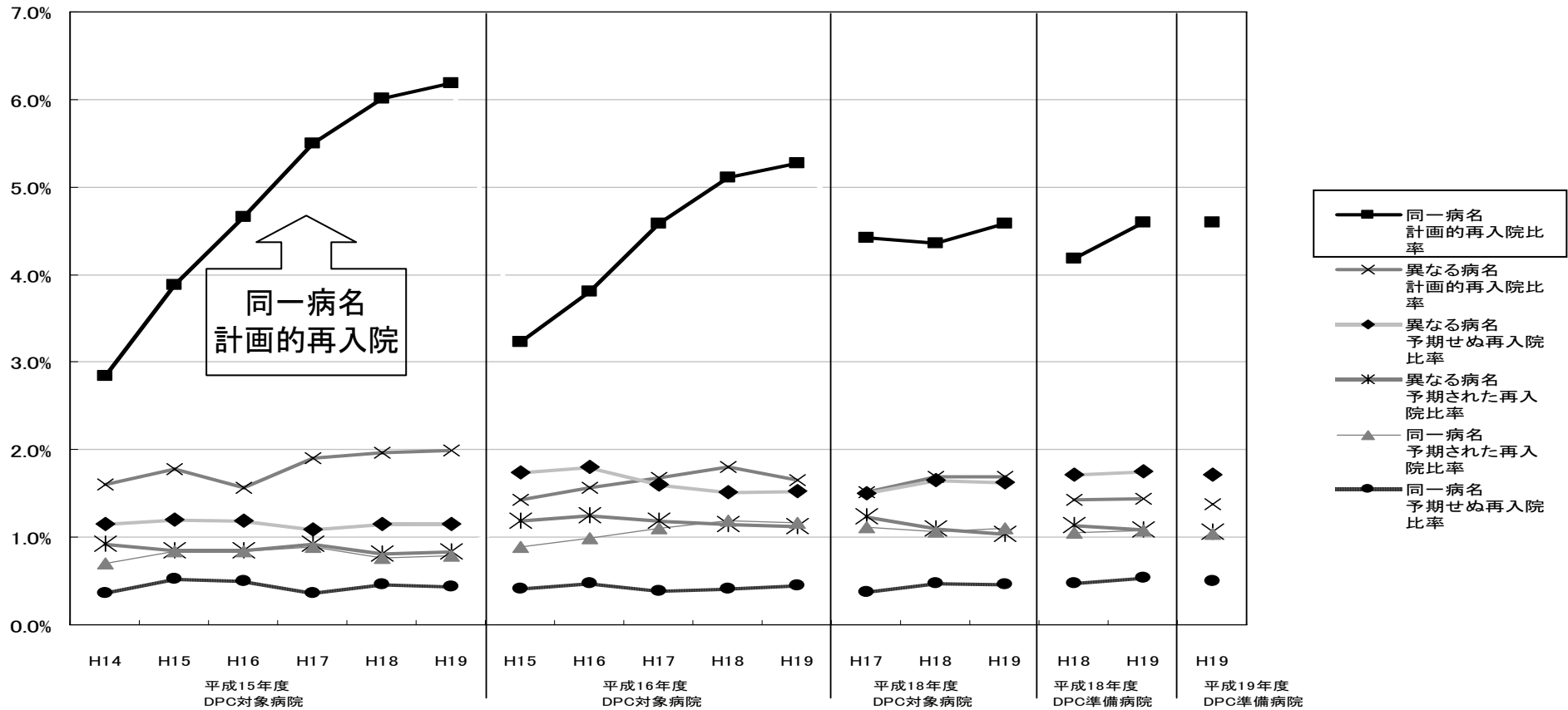


出典 平成18年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)  
平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)

# DPCにおける再入院率の内訳①

○ 「同一病名」による「計画的再入院」が増加傾向にある。

前回入院と今回入院の病名同異別・再入院率

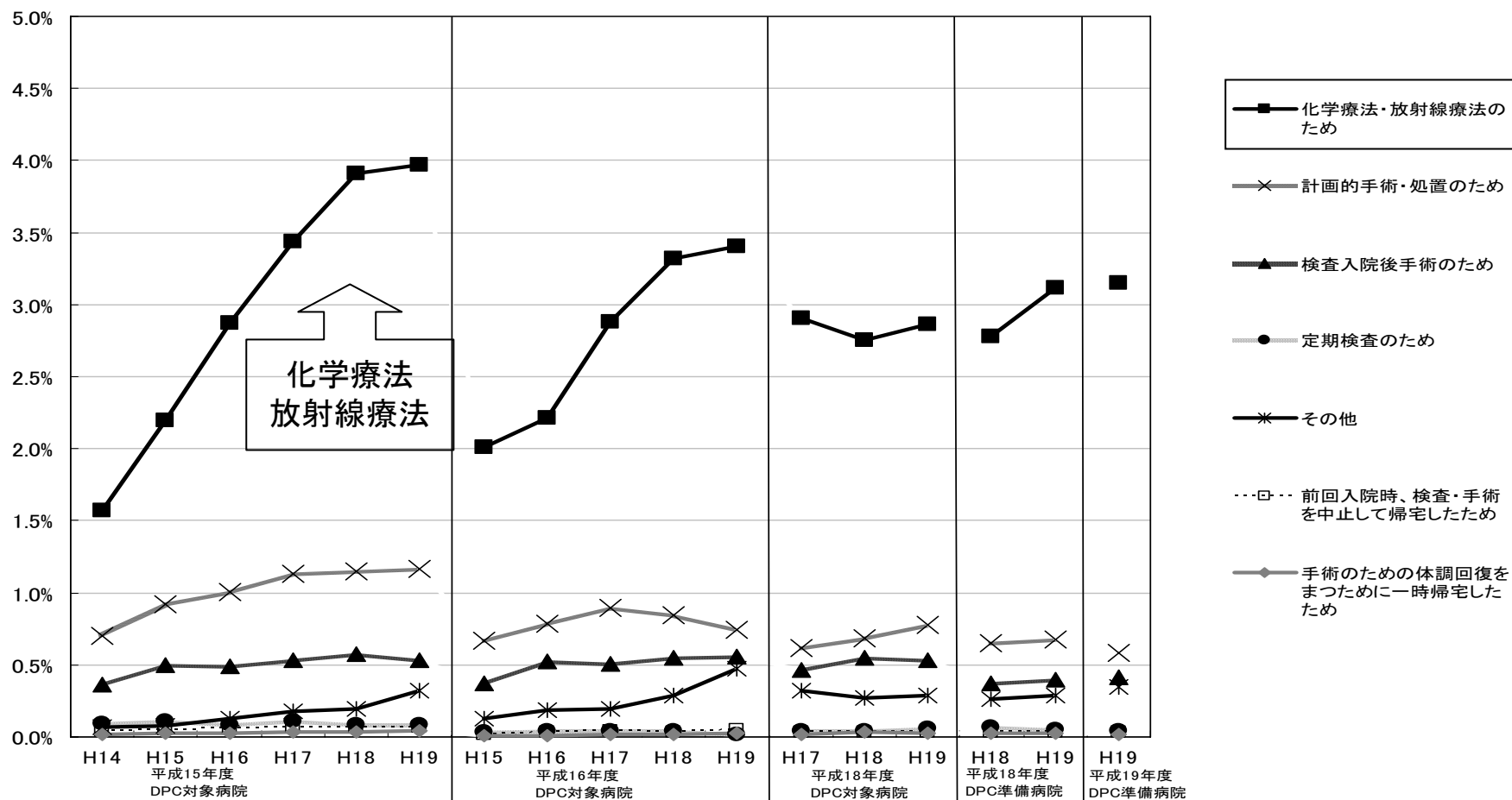


出典 平成18年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)  
 平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)

# DPCにおける再入院率の内訳②

○ 「同一病名による計画的再入院」のうち、「化学療法・放射線療法」の増加割合が大きい

同一病名による計画的再入院の理由別・再入院率

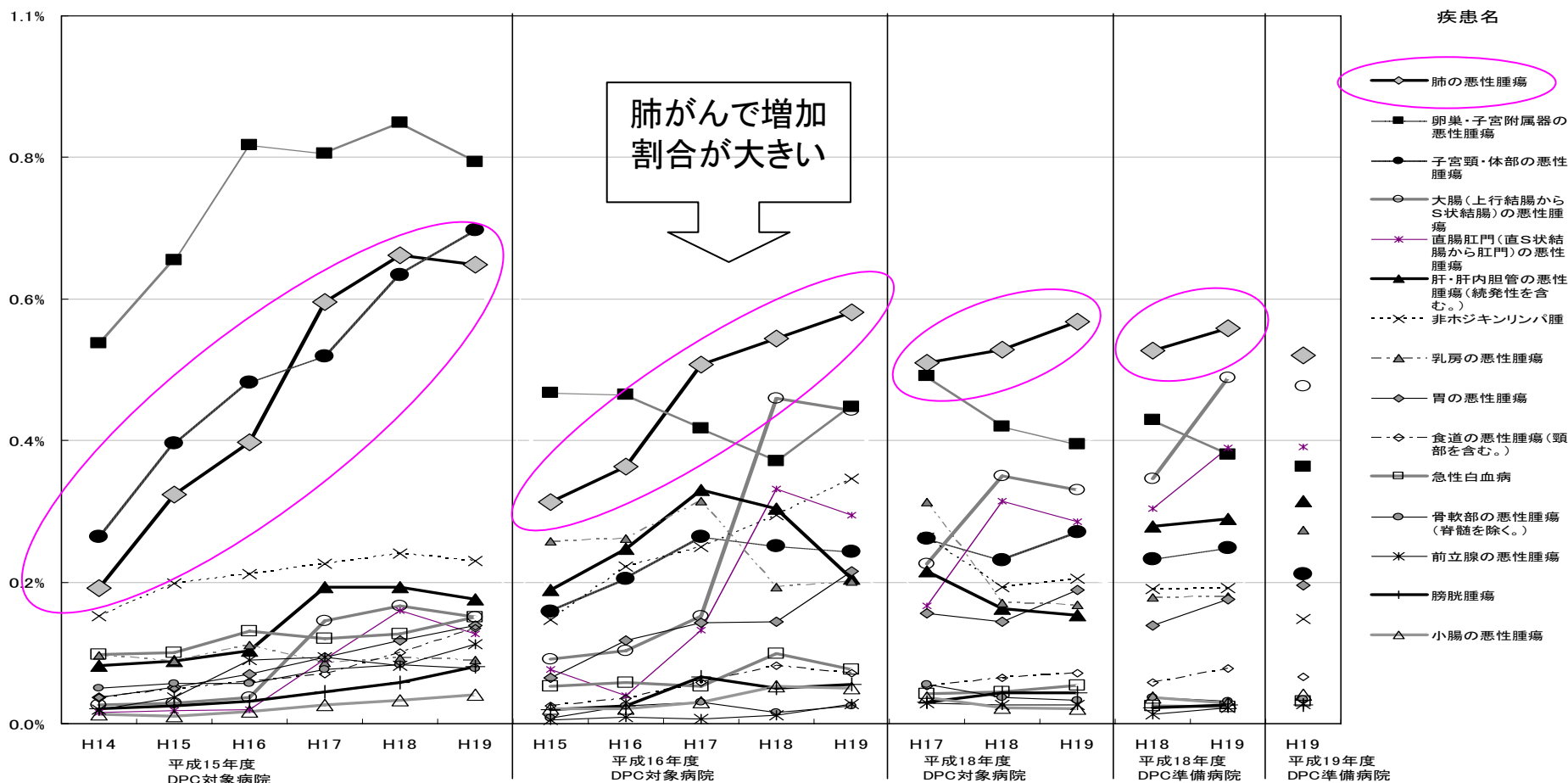


「DPC導入の影響評価に関する調査」より集計

# DPCにおける再入院率の内訳③

○ 肺がん等において、「化学療法又は放射線療法」による治療の為の再入院率の増加割合が大きい。

計画的 化学療法・放射線療法の上位15疾患再入院率

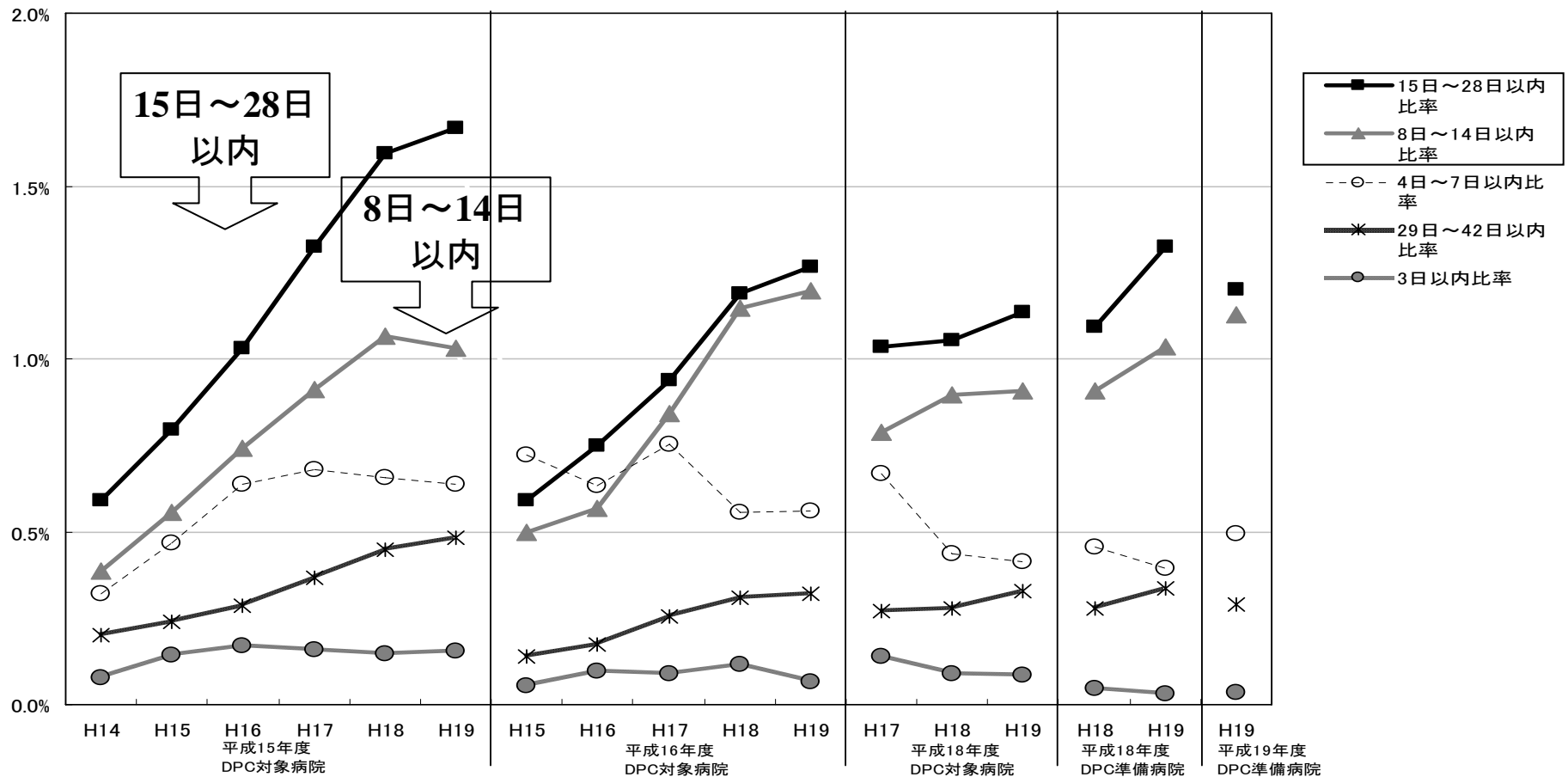


出典 平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)

# DPCにおける再入院率の内訳④

○ 期間別では、「8日～14日以内」及び「15日～28日以内」の再入院率の増加割合が特に大きい。

同一病名による計画的 化学療法・放射線療法の期間別・再入院率

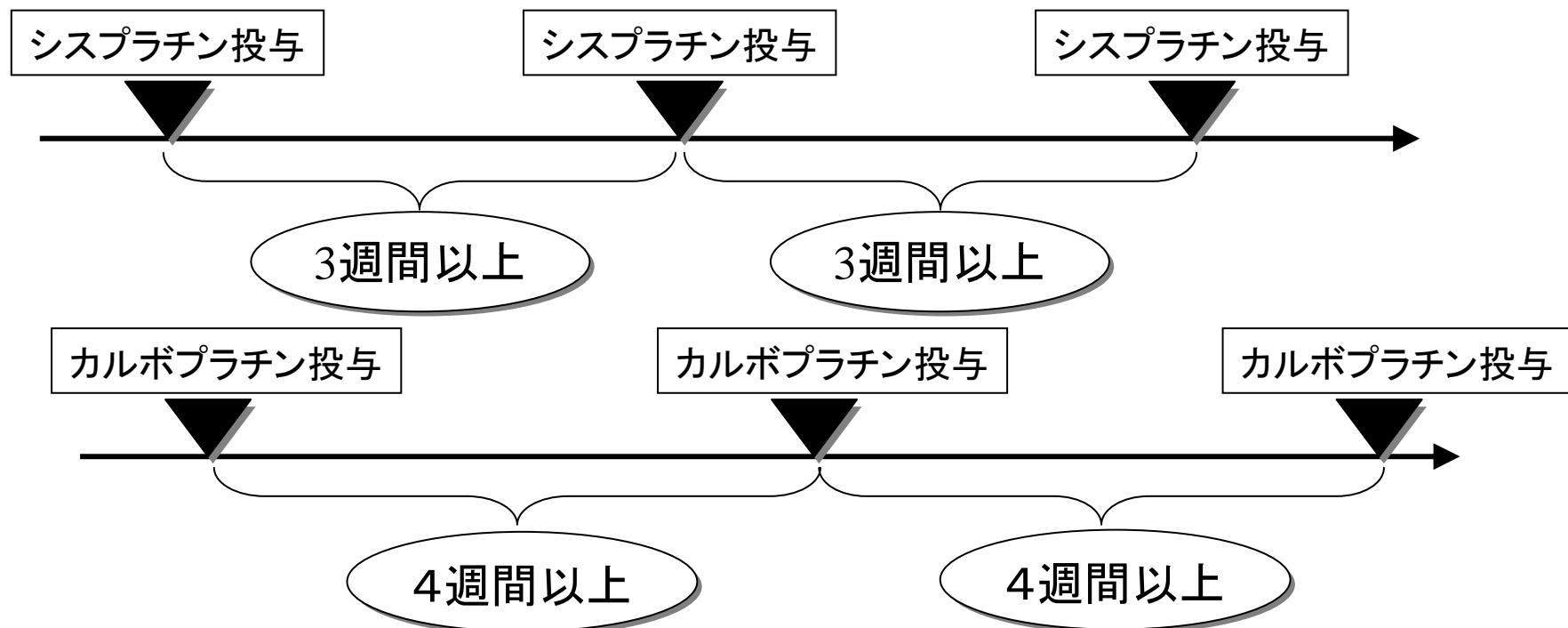


「DPC導入の影響評価に関する調査」より集計

# 化学療法による治療の一例（肺がんの場合）

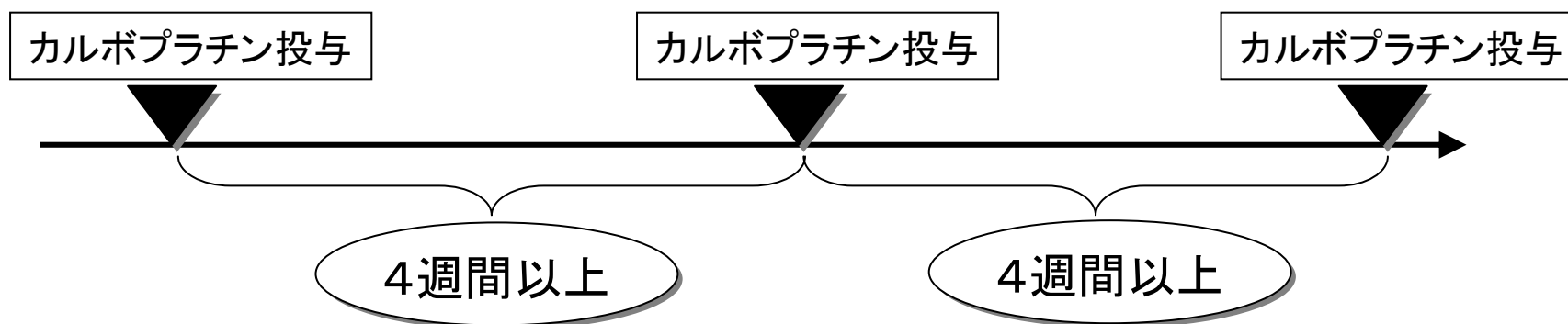
- 肺がん診療ガイドライン（日本肺癌学会／編（2005年版））において、肺がん（非小細胞肺がん）の化学療法では、シスプラチンを含む抗がん剤併用療法を推奨されている。  
※临床上は、シスプラチンの代わりに、同じ白金製剤であるカルボプラチンが用いられることも多い。
- 薬剤の添付文書において、シスプラチンは3週間以上、カルボプラチンは4週間以上の間隔で投与することとされている。

＜肺がんに対する抗がん剤の投与の例＞



# 化学療法による治療の一例(卵巣がん)

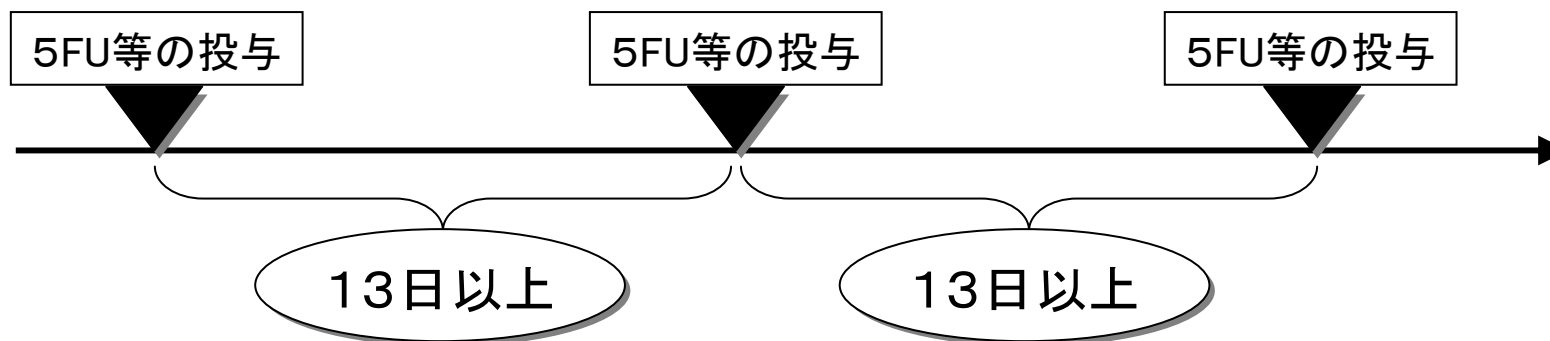
- 卵巣がん治療ガイドライン(日本婦人科腫瘍学会／編(2004年版))において、卵巣がん(上皮性卵巣腫瘍)の化学療法では、TJ療法(カルボプラチン及びパクリタキセルの併用療法)が、第一選択とされている。
- 薬剤の添付文書において、カルボプラチンは4週間以上の間隔で投与することとされている。





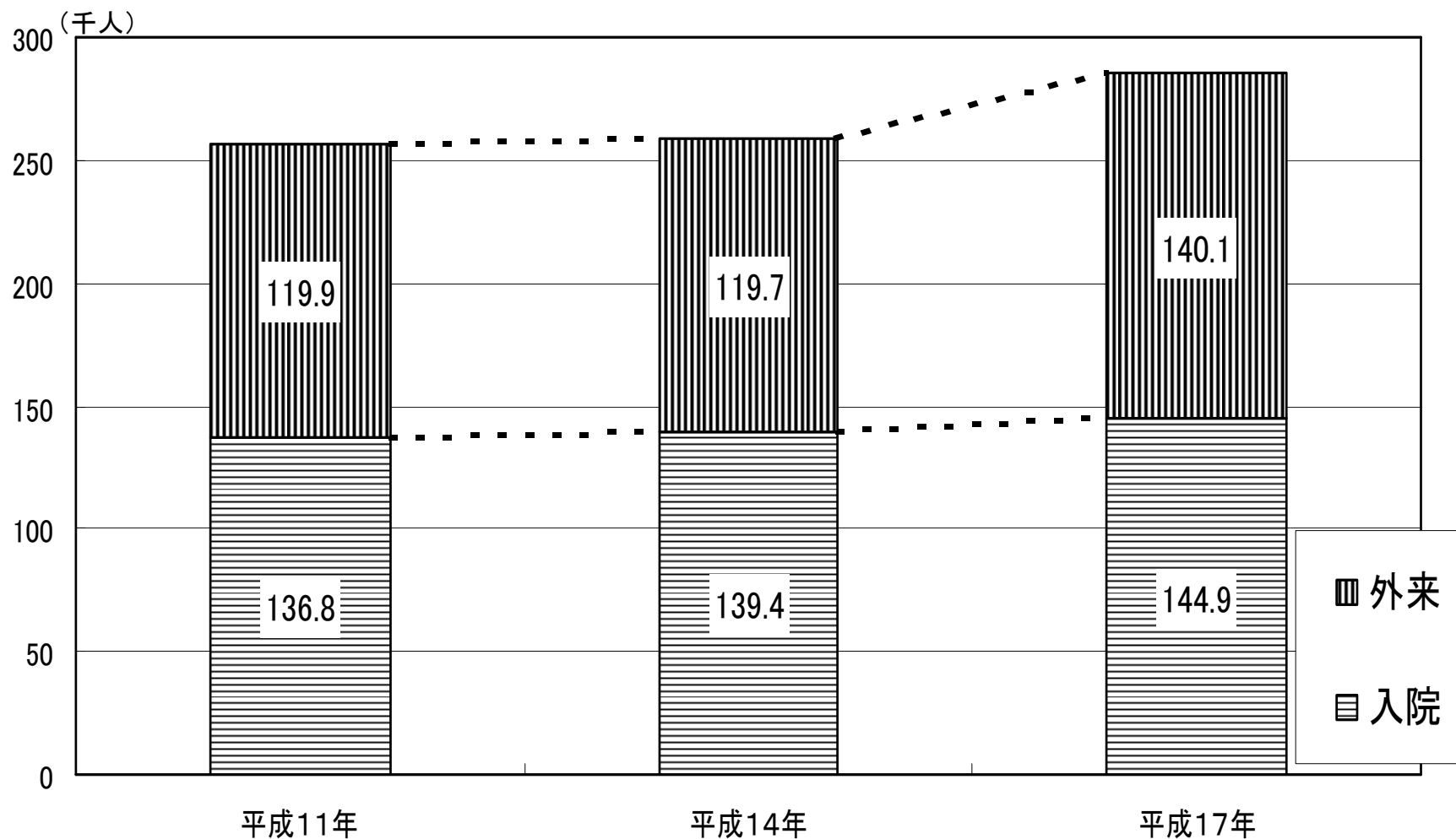
# 化学療法による治療の一例(大腸がんの場合)

- 大腸がん診療ガイドライン(大腸癌研究会／編(2005年版))において、5つのレジメンが示されているが、その中でも、入院では、FOLFOX療法(フルオロウラシル(5FU)・レボホリナートカルシウム・オキサリプラチンの3剤を併用)が行われることが多い。
- 薬剤の添付文書において、5FUとオキサリプラチンを併用する場合は少なくとも13日間投与間隔をあけることとされている。



# (参考)入院・外来別 悪性新生物患者数

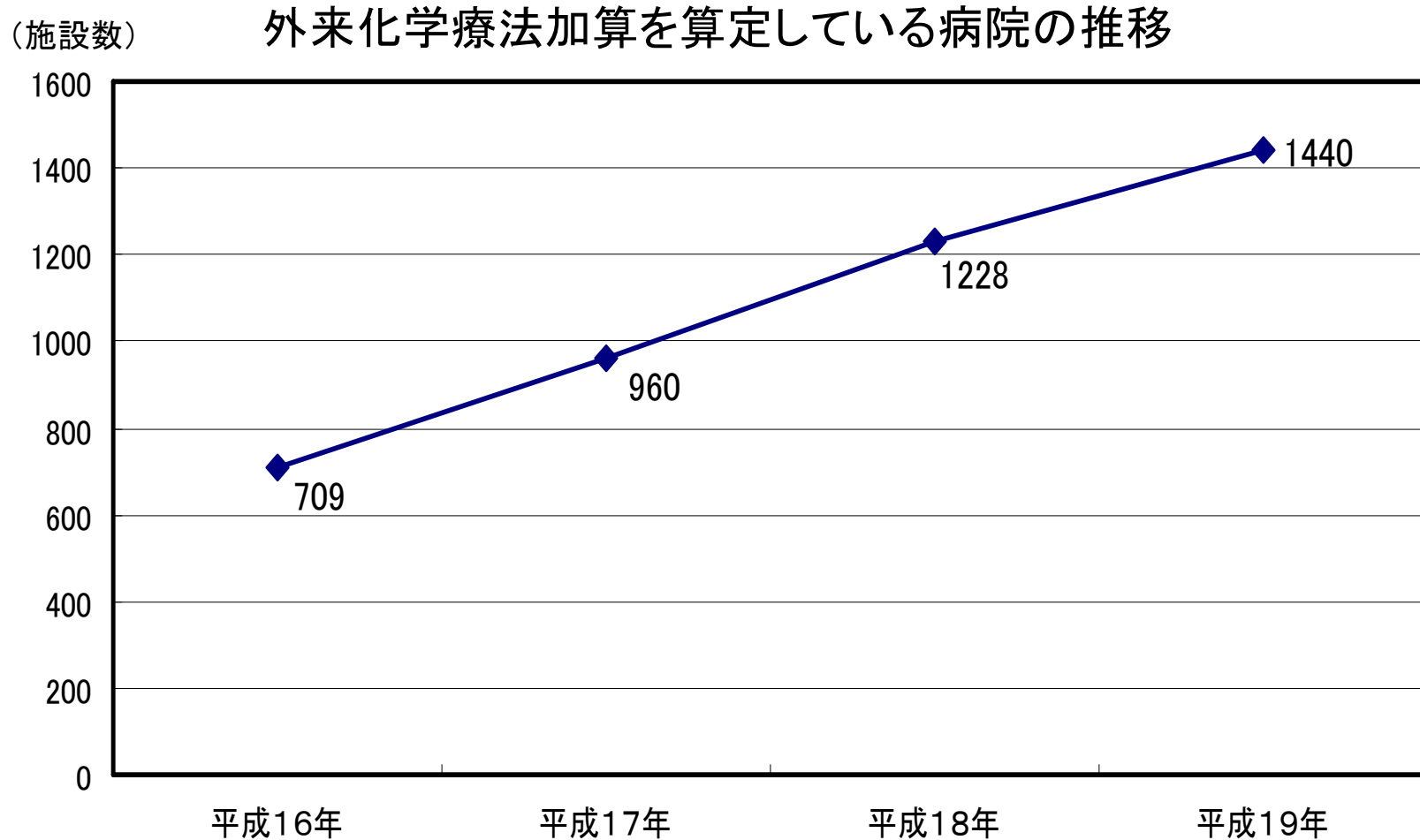
○ 悪性新生物に対する治療については、外来の比重が大きくなっている。



出典 患者調査(厚生労働省大臣官房統計情報部)

# (参考) 外来化学療法 の 推移

○ 近年は、外来化学療法加算を算定する病院が増加傾向にある。

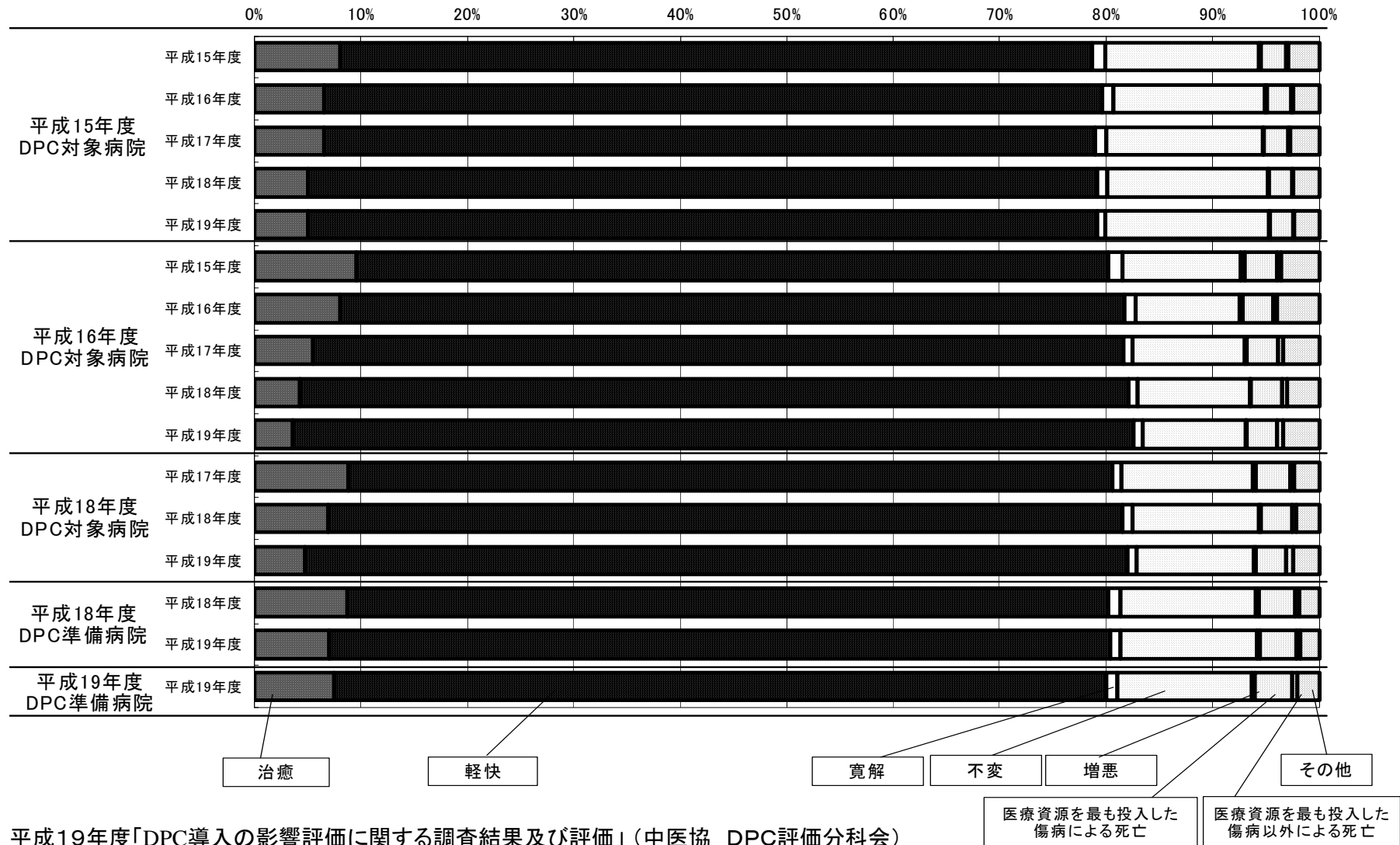


出典 厚生労働省保険局医療課調べ

### 3 転帰(治癒・軽快)について

# DPCによる転帰の推移①

- 治癒及び軽快を合計した割合は全ての病院類型においてほぼ横ばい傾向
- 治癒の割合は全ての病院類型で減少傾向であり、軽快の割合は全ての病院類型で増加傾向



出典 平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果及び評価」(中医協 DPC評価分科会)

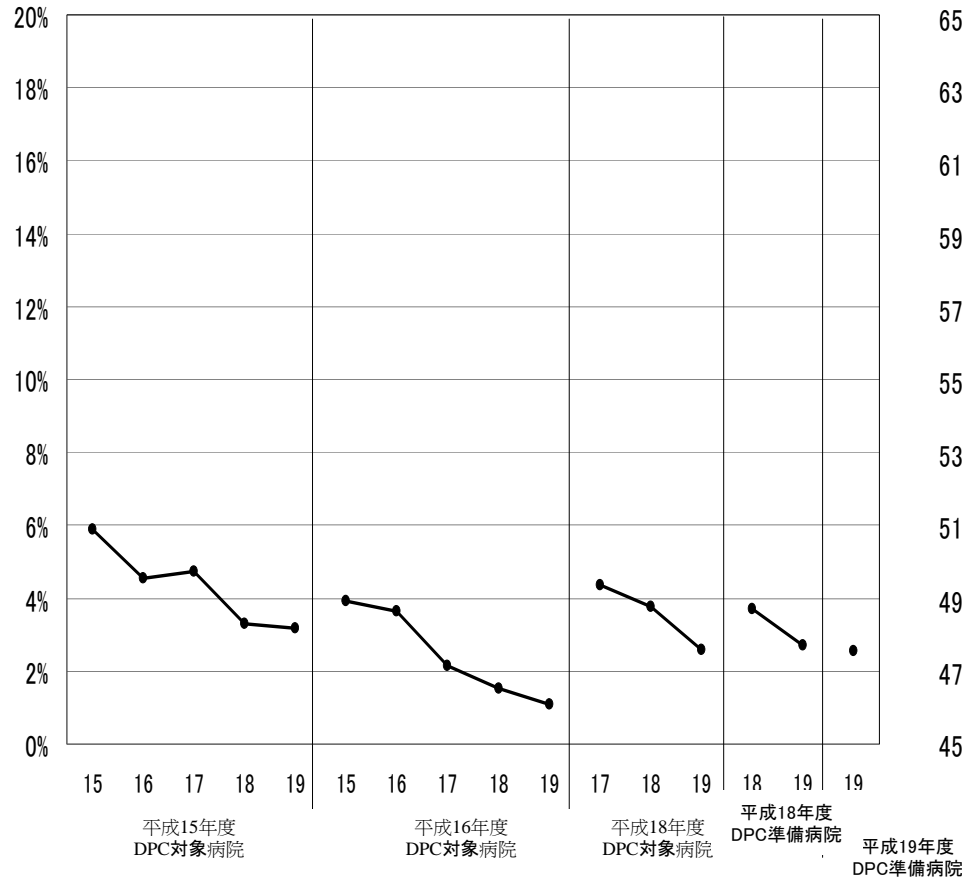
# DPCによる転帰の推移②

病院類型		平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
平成15年度DPC 対象病院（割合）	治癒	8.08%	6.52%	6.56%	5.05%	5.00%
	軽快	70.65%	73.08%	72.45%	74.07%	74.17%
	治癒+軽快	78.73%	79.60%	79.01%	79.12%	79.17%
平成16年度DPC 対象病院（割合）	治癒	9.62%	8.03%	5.47%	4.26%	3.63%
	軽快	70.57%	73.70%	76.14%	77.86%	78.92%
	治癒+軽快	80.19%	81.73%	81.61%	82.12%	82.55%
平成18年度DPC 対象病院（割合）	治癒	.	.	8.85%	6.88%	4.80%
	軽快	.	.	71.72%	74.67%	77.24%
	治癒+軽快	.	.	80.57%	81.55%	82.04%
平成18年度DPC 準備病院（割合）	治癒	.	.	.	8.70%	6.99%
	軽快	.	.	.	71.50%	73.40%
	治癒+軽快	.	.	.	80.20%	80.39%
平成19年度DPC 準備病院（割合）	治癒	.	.	.	.	7.49%
	軽快	.	.	.	.	72.55%
	治癒+軽快	.	.	.	.	80.04%

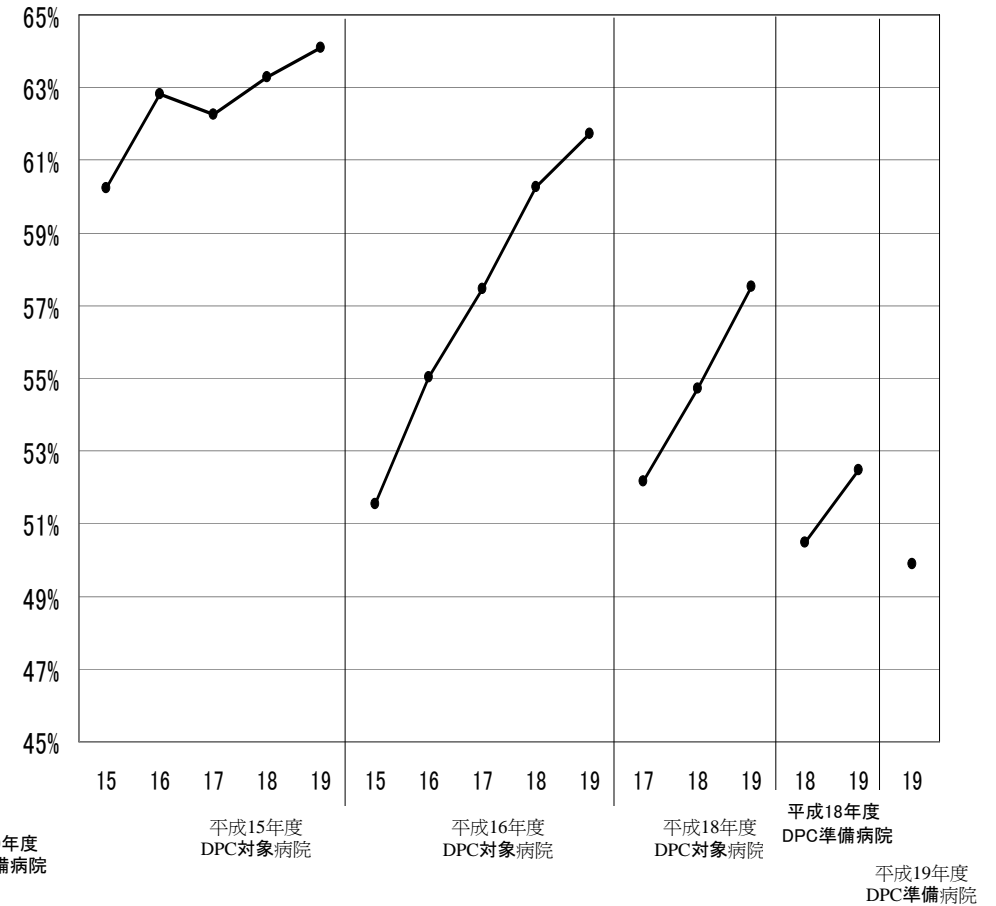
出典 平成19年度「DPC導入の影響評価に関する調査結果および評価」(中医協 DPC評価分科会)

# がんの治癒・軽快の推移

## 治癒



## 軽快



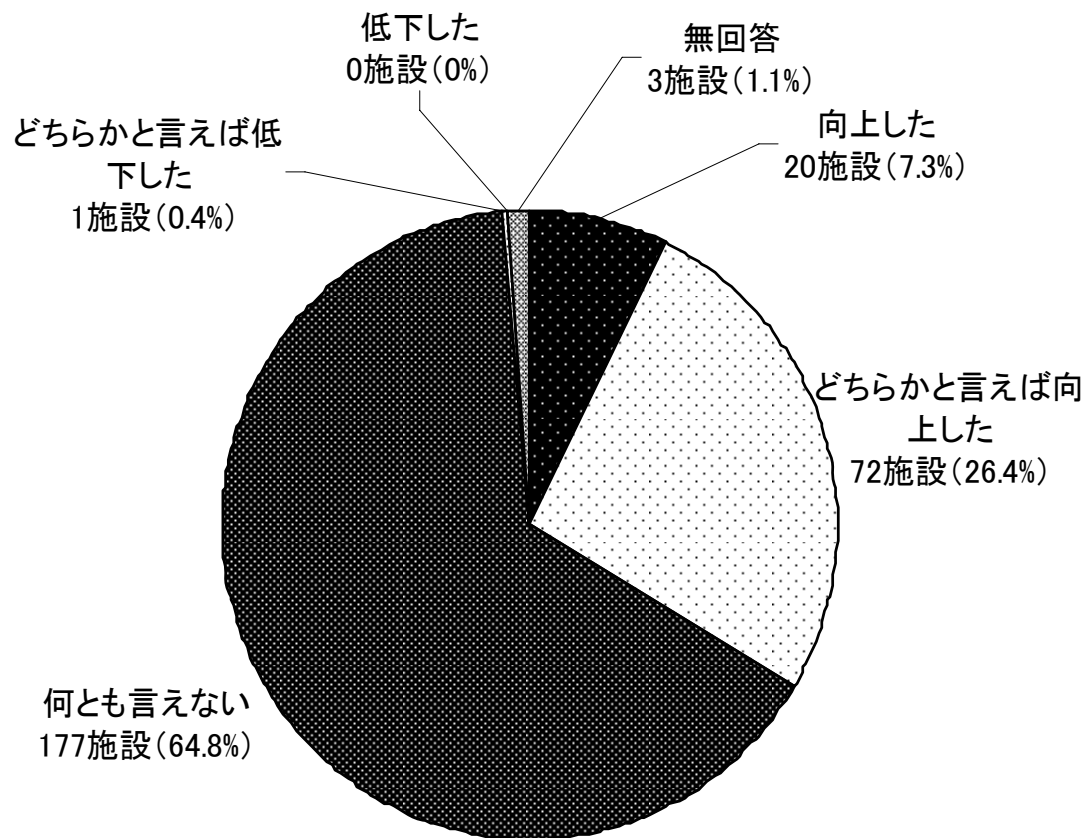
「DPC導入の影響評価に関する調査」より集計

## 4. DPC対象病院での診療状況について



# DPC対象病院での医療の質について

問 DPCの導入で患者に提供する医療の質は全体としてどう変化したと思いますか。



出典:平成20年10月 日本病院会調べ

※ 調査の概要

平成20年6月、日本病院会加盟のDPC対象病院400施設の全てにアンケートを実施。

回答273施設(回答率68.3%)

# DPCにおける後発医薬品の使用状況

薬剤費における後発医薬品の占める割合(金額ベース)

施設類型	平成16年度	平成17年度	平成18年度
平成15年度DPC対象病院 (82病院)	2.6%	3.4%	4.1%
平成16年度DPC対象病院 (62病院)	5.1%	7.4%	8.8%
平成18年度DPC対象病院 (216病院)	—	4.1%	7.1%
DPC準備病院 (371病院)	—	—	4.7%
総計 (731病院)	3.4%	4.1%	5.4%

出典 平成19年6月22日DPC評価分科会「DPC対象病院及び準備病院における後発医薬品の使用状況について」

# まとめ

- 1 急性期医療における平均在院日数は、DPCに限らず、諸外国を含めて減少傾向である。
- 2 DPCにおける再入院率の増加については、近年のがんに対する化学療法の拡大に伴う影響も考慮する必要があるのではないか。
- 3 DPCにおいて治癒が減少傾向であり、軽快が増加傾向であることも、近年のがん治療や急性期医療に対する考え方も考慮する必要があるのではないか。
- 4 DPC対象病院では、医療の質が低下したと考えている割合はほとんどなく(日本病院会のアンケート)、一方で、後発薬品の使用が促進されている。